

認知能力低下 車が検知

「短い車間」「信号遅れ」で

ホンダA | 開発へ

ホンダは、車の走行状態や運転者のわずかな傾向を人工知能（AI）で分析し、運転者の体調の異変を見つける技術開発に乗り出す。社会問題となっている高齢ドライバーの事故を減らし、認知症や緑内障の早期発見につながる期待もある。2030年頃の実用化を目指す。

ホンダは、国の量子科学技術研究開発機構と共同で、磁気共鳴画像（MRI）やセンサーを使って、運転者の脳や目の動きを分析している。事故につながるミスの原因を探るため、運

転者の視線をカメラで検知し、横断する歩行者の見落としを警告する技術を開発中だ。こうした技術を活用し、車が左右にふらついたり、車間距離が短くなったりす



る傾向が出た場合に、認知機能や空間を把握する能力が低下していることを知ら

せる機能を開発する。センサーやカメラにAIを組み合わせ、運転支援だけでなく、体調や病気の疑いの分

析に踏み込む。信号への反応が遅れるようになった場合は、視野が狭くなっている恐れを伝える。緑内障に多く見られる症状だが、進行が遅く、自覚は難しい。今回の開発は、運転者に事故のリスクを通知する。運転者は症状を自覚する前に、体の異変に気づききっかけになる。

運転免許の保有者は4人に1人が65歳以上となり、高齢ドライバーが起す事故を減らすことが課題になっている。技術開発により、能力の低下に気づけば、運転を控え、免許を返納する動きにもつながりそうだ。自動車各社は、日頃の運転データを蓄積、分析し、安全運転に生かす技術の開発でしのぎを削っている。

トヨタ自動車は、運転者の視線や顔の向き、まぶたの開き具合をカメラでとらえ、AIが異常を検知するシステムを一部の車種に搭載した。走行中の脇見や眠そうな表情を検知すると、警告音を鳴らしたり、シートベルトを振動させたりして注意を促す。マツダもメラとセンサーで、居眠りや急病を検知し、車を減速させ、エンジンを止める機能を開発し、22年以降に新型車へ搭載を目指している。ホンダの新技術は、もっと早い段階から異変に気づくことを狙う。ホンダの当者は「車には様々なデータが蓄積されている。リスクを察知し、安全技術にかしたい」と話している

読売新聞
オンライン
ご登録は▼
お問い合わせ